

2022年6月19日 半田朝礼拝

午前10時30分

司会 牧之瀬俊彦

奏楽 永井 花

前 奏

招 詞

詩編 第27章4節

讚美歌

讚美歌 21-210-1 (来る朝ごとに)

交 読

詩編 第27篇 (p. 28)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第16章19~20節

(新約 p. 98)

讚美歌

讚美歌 21-51-1 (愛するイエスよ)

説 教

今日のこの朝の礼拝で、マルコによる福音書を
終わります。読み始めてどれくらいになるのか、おそらく
5年くらいは経っているのではないかと思います。ここで
説教を聴き続けた方の中には、すでにこのみ言葉を聞きな

がら召された方がおられます。あるいは途中から加わって下さったので、最初の中からマルコと一緒に聞いてきたわけではない方も、おられます。ただ、そうしたいろんな関わり方がある一方で、共通のことがあります。それは、福音書を読むということはどういうことか。そしてそれを読み終えるということはどういうことか。これは皆に問うていい、共通の問いだろうと思います。たとえばわたしたちは本を読むだろうと思います。もし心惹かれる、夢中になってしまうような本と出会ったらどうでしょうか。少なくともそれを読んでいる最中は、その本の世界に浸った気分を味わいますから、場合によったら何度でもその世界に浸るようなそんな読み方もあるだろうと思います。では、聖書の場合はどうでしょうか。福音書を読み終えて閉じるということは、ある意味、わたしたちがひとつのいのち、時間を生き切ったということになるのではないのでしょうか。そしてまた、新たに生き始めるということでもあると思います。

マルコによる福音書は皆さんが見てすぐわかるように、第 16 章の 8 節で未完の形で書き終えています。明らかに常識に反する終わり方をしています。それはまるで、どうぞ読む人ひとりびとりが、読む教会のひとつひとつが、この結びをつけてくださいとお願いしている、考えているかのようで、そして実際にわたしたちは、今日与えられている 19 節から 20 節にかけては、その後の教会が付け加えた結びの一部ですし、実際には節の番号も元々ついていないと考えた方がいいものです。新共同訳聖書が「結び 二」と呼んでいる後半も、これはまた、全く別の教会が付け加えた言葉です。読後感というのとも、違うように思います。そうではなくて、マルコ福音書が、書き続けてきたことが、どんな響きを後に残しているか、ということの記録だろうと思います。福音書を読み終えた人が、どんな思いで立ち上がって、どのように生きたかということ、更に付録として、書き加えたようなものです。

そこで 19 節に、「主イエス」という言葉に目を留めま

す。この「主イエス」という言葉は、わたしたちにとって良く聞く言葉ですし、自分でも使う言葉だろうと思いますから、あまり特別な響きを持たなくなっているかもしれませんが、新約聖書の中にあります4つの福音書の中で「主イエス」と書かれている言葉は、ここだけです。これはとても不思議なことです。本来のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという福音書の中には「イエスという言葉と「主」という言葉がひとつになった表現はありません。むしろ使徒パウロが書いた手紙、その他の福音書以外の文書の中に、これが繰り返し出てきます。そうすると、言い換えれば、福音書が語っている「イエス」の物語を聞いた人たちが、「主イエスよ」とお答えした、そこに信仰の言葉と、信仰の心とが生まれたのだと理解することができるだろうと思います。その典型的な言葉をひとつここで紹介いたしますが、それは、パウロが書いたコリントの信徒への手紙第1の第8章5節です。

現に多くの神々、多くの主がいると思われているよう

に、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがいてもわたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。

この言葉をパウロが書いたのはとても具体的な場面においてでした。このコリントの教会は、ギリシャの町コリントにあります。コリントの人たちは、キリスト者を含めて日常の食事に肉を食べていました。けれど、今のわたしたちのように、どこかに設備の整った屠殺場があって、そこから獣の肉が送られて来るわけではありません。どこの町にも、ギリシャの人たちが信じる神々を祭る神殿がありまして、そこで、毎日多くの獣が献げられる。けれど、神々が実際にそれを食べてしまって肉が無くなるわけではありません。そこで、神に献げられて下げられた獣の肉が市場に出回る。キリスト者になって、主イエス・キリストと、その父なる神以外は拝まないと決意した人た

ちが、食事の時に、この肉は他の神様に献げられてしまったものだ、果たしてこれを食べてもいいのだろうか戸惑った。そこで、パウロは主と呼ばれるものは、ただイエス・キリスト以外にない、それ以外のものは、主としての力を持たない。だから、偶像に献られたものと言っても全く空しいものに献げられたのだから、その肉が偶像によって偶像の力で聖められ、わたしたちが触れてはならないものに変化したわけではない。その意味で、わたしたちは全く自由である。イエスは主であると告白することは、そのように、偽りのあらゆる支配者から自由になることを意味した。それは、ただ偶像の神々の支配からだけではなくて、ローマ皇帝を、主と呼ぶことから自由になるような激しいものでした。主と呼ばれるもの、主人と呼ばれるものはたくさんある。場合によっては、わたしたちは自分が主だと思ふことがある。そこで、そのようなところで、福音書が語ってきた「イエス」こそが本当の、真実の「主」であると知る、これは福音書を理解したということになります。

この主イエスを、マルコによる福音書は第 16 章の 19 節では、「天に上げられ、神の右の座に着かれた」方として書いています。こういう表現は、実はすでにわたしたちは耳にしている言葉です。どうしてかと言うと、わたしたちが唱える使徒信条の中に出てくる表現にあるからです。こうです。

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねるものとを審きたまはん。・・・

ただこの表現は、使徒信条の中で初めて出て来たわけではありません。既に、主イエス・キリストが、十字架につけられる前に、人々に裁かれておられた時に、その裁きの座で大き

な幻をご覧になりました（14：62）。人々に裁かれる中で、黙って裁かれるままにしておられながら、そこで、イエスが答えられた僅かな言葉の中に、「あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」という言葉がありました。あなたがたが、やがて、その幻を見るときがくる。人の子、つまり、わたしが神の右の座に座っているのを見る。十字架につけられるときの、そのイエスさまの預言の言葉が、ここで成就している。そのように信じて、ここに、その言葉が改めて記されたのかもしれませんが。そのような信仰の言葉が、ここで、語られていると言うこともできる。そして、もうひとつ考えられることは、多分、この結びが語られた頃の教会で、既に洗礼入会式で、この使徒信条が、あるいは、その原形と思われるものが用いられていたということです。既に、この頃ひとつの信仰の表現として用いられていたと考えることができる。

けれど、いったい、天に上げられて神の右の座に着かれるということは、どういうことでしょうか。例えば、古代の、

大昔の人はとても幼い考え方をしていたから、広い青空を見た時も、どこかの一角を指し示して、あそこに、イエスさまがおられる。主イエスがおられる、あそこで神の右に座っておられると言ったのでしょうか。それは違うだろうと思います。昔の人でも、そんな単純なことを言っているではありません。主イエス・キリストは、甦られた。甦られて姿を消した。どこに行っただのか。父なる神のみもとにお帰りになった。わたしたちが生きている時間や、空間の束縛を離れて、永遠の世界に行かれた。永遠の世界に行っておしまいになってそれで知らん顔なのか。それはない、神の右の座に着かれた。それは、今ここで支配してくださるということです。時間や空間の束縛から離れて、全能の父なる神の右に座っておられるイエスさまは、だからこそ、今わたしたちと共にいてくださり、わたしたちの主となっていてくださり、わたしたちの支配者になっていてくださる。だからこそ、すぐその後で、「主は彼らと共に働き」という言葉が出てきます。天におられて、わたしたちの手の届かない所で、わたしたちの苦闘を眺めておられるというのではない

いのです。

半田教会の礼拝は朝だけですから、ほとんど賛美する機会がないのですが、奥田センターでの夕礼拝でよく賛美される曲に、讃美歌 21 の 218 番の「日暮れてやみはせまり」があります。この「主よ、ともに宿りませ」あるいは「主よ、わたしと一緒にいてください」と繰り返して歌う讃美歌の終わりに近く、こういう言葉があります。「いつでも、どんな時でもあなたの存在が必要です。あなたの恵みだけが、わたしに対する誘惑の力をくじくのです」。そして、主が、ここにいてくださること、わたしが、目を閉じようとするとき、眠るのではないのです、死ぬためです、その自分が死のうとする目の前にも、「どうか主よ、あなたの十字架をはっきりと突き出して見せてください。空が曇っていくような中でそれを輝かせてください。天を指し示してください。天の朝が明けて、地の陰が去っていく」。そう歌って、最後にこう歌います。「生きているときにも死ぬときにも、主よ、わたしのそばにいてください。わたしと一緒に

住んでください」。甦られた主が、甦られたイエスさまが天におられて、わたしの主となっていてくださるというのは、そういうことです。

そして、だから、この結びは更にこういうふう書き進めています。「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した」。何を宣べ伝えたのか。イエス・キリストのことを宣べ伝えた。それだけのことです。それは言い換えれば、聖書の話をするということです。

そのとき、この福音書に添えられた言葉はこう書かれています。「主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしいよってはっきりとお示しになった」。ここで、「真実であることをはっきりとお示しになった」と記されている言葉は、原文ではひとつの言葉です。たとえばここに記されている言葉は、ヘブライ人への手紙で「安定した錨」と訳しています。つまり信仰というのは錨のようなものだと言っ

ています。錨というのは、船をしっかりと繋ぎ止めるために、海の底に投げ下ろすものです。けれど、もし錨の下ろし方が間違っていたり、その錨を受け止めた海底の地形によっては、錨を下ろしても、あまり役に立たないことがあるかもしれません。あるいは止まっているように見えても、大波が押し寄せれば、錨もろとも流されてしまうことだってあります。けれど、信仰というのは安定した錨である、しっかりと繋ぎ止めてしまつて、わたしたちがびくともしなくなるようにしてくれる働きをするものだということです。そのような確かな基盤の上に、しっかりと足を踏まえて立つ、あるいは、立たせることを意味する言葉です。わたしたちは言葉を語ります。たとえば説教者は言葉を語ることに一所懸命になります。そして、おそらく言葉を語る人はみんな、たとえばここに教会学校の先生方がおられます。役員の方々がおられます。どこか心の隅でいごごちの悪さを持つことがあるだろうと思います。どんなに一所懸命に言葉を語っていても、何か自分の言葉は空しいのではないか、何かで裏打ちしなければいけないのではないかと思うことがあるだ

ろうと思います。けれど、自分の生活が自分の言葉を裏打ちすることはできません。そんな力はない。ただわたしたちが語るのは、イエスさまの話をするだけです。取り次ぐだけです。わたしたちは自分の力で自分の言葉の裏打ちをするのではない。主イエスが裏打ちしてくださる。パウロは、わたしたちは神と共に働く者だと言いましたが、このマルコによる福音書の言葉は、主イエスは、わたしたちと一緒に働いてくださっている方だと書いています。これは、たとえば誰もが忘れてはならない言葉です。あなたと一緒にイエスが働いていてくださる。イエスが働いていてくださる、その事実に立ちます。

福音書を閉じた時、初代の教会の人たちはその思いを抱きました。ここに福音が語られている。それが今、わたしを生かしている。わたしの言葉になっている。そう信じました。

「結び 二」という箇所について多くは語りません。ただ読んでお分かりになるだろうと思います。婦人たちが、ペト

口とその仲間たちのところに行って、手短かにイエスの甦りになった話をしたと書いた後で、「その後、イエス御自身も、東から西まで、彼らを通して、永遠の救いに関する聖なる朽ちることのない福音を広められた」とあります。これは、婦人たちが語る場所、いつも、そこにイエスさまもおられたということでしょう。そして、そこで語られる福音は、永遠の救いに関わる聖なる朽ちないもの、喜びのおとずれ、それ以外の何物でもなかった。そう言って、「アーメン」と最後の言葉を書き記しました。わたしたちも、心から「アーメン」と信仰をひとつにして唱えたいと願います。祈ります。

主イエス・キリストの父なる神さま、聖書に聞き、語る、それがわたしたちの人生であることを、改めて、あなたからのかけがえのない賜物として受け入れ、感謝いたします。この地上で生きる限り、み言葉を問い続け、み言葉に生かされ続けることが、できますように。やがてわたしたちもすべて地上での命を終えます。その時にも、いいえ、その時こそ、み言葉

こそわたしのいのち、主イエスこそわたしの主であると、信仰の慰めを知ることができますように。それゆえに、今、喜びをもって生きることが出来ますように。主のみ名によって祈ります。

アーメン

讃美歌 讃美歌 21-448-3 (主のもとに集うたびに)

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>